

大豆情報

秋田地域振興局農林部農業振興普及課
No.2

Tel 018-860-3410

Fax 018-860-3834

適期中耕・培土で初期生育を確保しましょう！

1 生育状況

秋田管内の播種作業の終期は6月25日(平年差+3日)と、田植作業の遅れ等の影響によりやや遅くなりました。

播種後は、出芽・揃いともに概ね良好です。

6月30日現在の生育は、主茎長は13.7cm(平年比136%)と長く、葉数は3.0葉(平年差+1.0葉)と多くなっています。

○生育調査結果(6月30日現在)

	主茎長(cm)	葉数(葉)
R 7	13.7	3.0
R 6	12.6	2.6
平年	10.1	2.0
平年比・差	136%	+1.0

管内3カ所平均値。

※1地点初生葉展開期のため未調査

2 中耕・培土

中耕・培土は雑草防除、倒伏防止、湿害回避等の効果があり、大豆の生育向上を図るうえで重要な作業です。適期を逃さず実施しましょう。

①中耕 … 初生葉展開期～本葉1葉期頃に子葉が隠れない程度に行います。

②培土(1回目)… 本葉第2～3葉期頃に初生葉が隠れない程度に行います。

③培土(2回目)… 本葉第6～7葉期頃に、本葉1葉目の節が隠れない程度に行います。

培土は、株元までしっかりと土が盛られるように、遅くとも開花10日前には終了しましょう。

3 害虫対策

1) ウコンノメイガ

ウコンノメイガは、7月6半旬(26～31日)に40～60茎当たりの葉巻数を調査し、茎当たりの平均葉巻数が1.3個以上確認された場合は、7月下旬～8月上旬に薬剤防除を行います。

農作物病虫害発生予察情報発生予報第3号(6/24、病虫害防除所発表)によると、ウコンノメイガの発生量は平年並と予想されています。本種は飛来性害虫であるため、急激に発生量が増加する場合がありますので今後の予察情報に注意してください。



写真 ウコンノメイガによる葉巻

表 ウコンノメイガの薬剤散布

農薬名	希釈倍数(散布液量)	散布時期
カスケード乳剤	4,000倍	150～300L/10a 7月下旬～8月上旬
スミチオン乳剤	1,000倍	
トレボン乳剤	1,000倍	
プレバソンフロアブル5	4,000倍	

2) 食葉性鱗翅目幼虫(ツメクサガなど)

農作物病虫害発生予察情報発生予報第3号(6/24、病虫害防除所発表)によると、食葉性鱗翅目幼虫の発生量はやや多いと予想されています。

防除対象がツメクサガの場合には、幼虫の発生初期(若齢期)にエルサン乳剤1,000倍、トレボン乳剤1,000倍、フェニックスフロアブル4,000倍液を100～300L/10a散布してください。

4 雑草防除

当面の雑草防除は中耕・培土により行いますが、中耕・培土で雑草を抑えられなかった場合などは、大豆生育期処理除草剤を使用します。除草剤の種類により使用可能な時期が異なるので、使用基準に注意してください。

また、農薬散布時にほ場周辺の他作物へ薬剤が飛散しないよう、ドリフト軽減ノズルの使用や散布時の風速、風向き等に十分注意しましょう。

農薬名	使用時期	使用量	希釈水量	対象雑草	
				イネ科	広葉雑草
パワーガイザー液剤※1	だいた出芽期～1葉期	300ml/10a	100L/10a	○	○
ナブ乳剤	ノビエ3～5葉期	150～200ml/10a	100～150L/10a	○	×
ワンサイドP乳剤	ノビエ3～5葉期	75～100ml/10a	70～100L/10a	○	×
ポルトフロアブル	ノビエ3～5葉期	200～300ml/10a	100L/10a	○	×
大豆バサグラン液剤※2	だいた2～6葉期	100～150ml/10a		×	○

※1中耕・培土及び他の茎葉処理剤との体系処理を前提にする。処理後3日間の平均気温が16℃を下回ると予想される場合や処理後に連続した降雨が予想される場合は、薬害が生じる恐れがあるため、使用しない。

※2適用品種はリュウホウとする。ツユクサやエノキグサ、シロザ等には効果が劣るので、発生に注意する。

5 高温・大雨対策

7月3日に仙台管区気象台から発表された東北地方1か月予報によると、**気温は高く、特に期間の前半は気温がかなり高い状態が続く見込みとなっています。**また、降水量は少ないと予報されていますが、突発的な集中豪雨が発生する可能性もありますので、今後の異常高温や大雨に備え、以下の対策を実施してください。

① 高温対策について

- 大豆栽培では、**地下水水位40cm**程度が最も根張りが良く、根粒菌の発生も良好になります。
- 開花期以降は暗渠を閉めるなど、大豆に好適な地下水水位を保ちましょう。
- 地下かんがいシステムが設備されているほ場では、**水分不足が収量に大きく影響する花芽分化期から開花期終期30日までの期間(7月上旬～8月下旬)は積極的に活用し、地下水水位40cmの保持に努めましょう。**
- 晴天が1週間以上続き、大豆の葉が立っているような場合は、畝間かん水を実施しましょう。**全体に水が行き渡ったら、速やかに排水しましょう。

※水回りや排水性の悪いほ場では湿害の恐れがあるため、実施しないでください。

② 大雨対策について

- 排水路や明きよの点検を行いましょう。明きよの溝が崩れている箇所や溝が浅く水が流れない場所があれば、手直しをして排水に努めましょう。**
- 湿害により生育不良となったほ場では、湿害軽減対策として窒素追肥の効果が認められています。**追肥は開花期(開花日～開花後10日頃)に硫安や尿素を用い、窒素成分で5～10kg/10a施用します。(参考:管内の開花盛期(平年):7月27日)
- 冠水や停滞水の影響により、茎疫病や黒根腐病等の土壌病害が拡大する場合があります。**こまめにほ場巡回を行い、罹病株を確認した際には早期に抜き取ってください。